関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

拡張自己の構造 : 日・西・米・中における普遍性の検討

その他のタイトル	The structure of the extended self : Universarity among Japanese, Spanish, Americans, and Chinese
著者	池内 裕美, 藤原 武弘
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	35
号	3
発行年	2004-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022284

関西大学『社会学部紀要』第35巻第3号，2004，pp.39-59　　ISSN 0287-6817

拡張自己の構造
—日・西・米・中における普遍性の検討—

池内裕美・藤原武弘[1)]

The structure of the extended self
: Universarity among Japanese, Spanish, Americans, and Chinese

Hiromi IKEUCHI and Takehiro FUJIHARA

Abstract

The "Extended self" is defined as "the aggregation of all objects that people regard as a part of self." The purpose of this study was to investigate to what extent the structure of the extended self had universal characteristics beyond differences of sex, age, and country. Five hundred and fifty-nine university students in Japan, Spain, U.S.A., and China were asked to complete a survey questionnaire. The main findings were as follows: (1) The result of factor analysis indicated that the extended self was composed of 6 categories, that is, "Psychological or intraorganismic processes," "body parts," "important people," "material possessions," "objects in the natural environment," and "religion." It was also indicated that among these categories the first 4 categories, "Psychological or intraorganismic processes," "body parts," "important people," and "material possessions" were universally regarded as a part of the self; (2) In all of the four countries, more females than males tended to regard external objects as a part of the self. The result of further research conducted on 191 ordinary citizens in Japan suggested that more older people than younger ones regarded external objects as a part of the self.

Key words: extended self, external object, cross-cultural, universality

抄　録

「拡張自己」とは、「自己の一部であると認知、同定している全てのものの集合体」と定義されている。本研究の主目的は、こうした拡張自己の構造が、性や年齢、さらには国の違いを超えて、どの程度普遍性を持っているのかを検討することにあった。日本、スペイン、アメリカ、中国の大学生559名を対象に質問紙調査を行ったところ、主に次のような結果が得られた。（1）拡張自己は「心理的・体内的過程」、「身体の一部」、「大切な人々」、「物的所有物」、「自然環境内の対象物」、「宗教」の6カテゴリーからなり、最初の4カテゴリーは、ほぼ普遍的に自己の一部としてみなされることが示された。（2）4カ国全ておいて男性よりも女性の方が、外的対象物を自己の一部としてみなす傾向にあった。さらに日本人の一般市民191名を対象に調査したところ、高齢者は若者に比べて外的対象物をより自己の一部としてみなすことが見出された。

キーワード：拡張自己、外的対象物、国際比較、普遍性

1）関西学院大学社会学部教授

問　題

我々は、非常に多くのものに取り囲まれて生活している。たとえば、自分自身の物的所有物、家族や友人あるいはペット、自然の風景、街の建造物、さらには法律や規則といった抽象的な概念などが、その極一例として挙げられる。そしてこれらの中の、ある特定のものに対して、我々は非常に強い愛着を抱く。時には、過度な愛着を持つあまり、それがまるで“自分自身の一部”であるかのように感じることすら珍しくない。

「拡張自己（extended self)」とは、このように外的対象物にまで拡張された自己のことであり、Allport（1955）やRosenberg（1979）を初め、Belk（1987, 1988)、Dittmar（1992)、Lancaster & Foddy（1988）などによって概念化されている[1]。例えばマーケティング学者であるBelk（1988）によると、拡張自己は、「私（“me”）としてみなされるものだけでなく、私のモノ（“mine”）としてみなされるものをも含んでいる自己」と規定されており、さらにその領域については、「外的な物や個人的な所有物に限定するだけでなく、体の一部分や臓器のような所有物と同様に、人間、場所さらに集団の所有物をも含むもの」として捉えられている。なお、ここでは、既存研究を総括した藤原・池内（1996）の定義にしたがい、拡張自己を「自己の一部であると認知、同定している全てのものの集合体」として規定する。

それでは、心理学の領域では、外的対象物と自己との関連性について、これまでどのような研究がなされているのであろうか。実は、こうした考え方自体は決して新しいものではなく、古くはJames（1890）が、自らの自己理論の中で、「知られる自己（self as known)」の構成要素として、「物質的自己（material self)」、「社会的自己（social self)」、「精神的自己（spiritual self)」の3つの自己側面を定義したことに由来する。なお「物質的自己」とは、自分の生命や身体、物的所有物というような物質のことを、「社会的自己」とは、地位や職業、名声など自分の社会的存在としての側面を、また「精神的自己」とは、自分の欲求や感情、意志、能力や性格など、個人の概念的・心理的側面を意味している。そして彼は「自己」に対する考え方を、次のように整理し、提示している。

「人間の自己とは、彼のものと呼び得る全てのものの総括、それは肉体や精神力だけでなく、彼の衣服や家屋、妻や子供、先祖や友人、彼の評判や仕事、土地、ヨットや口座預金をも含むものの総括である。これらのものは、全て彼に同様の感情を抱かせる。もしそれらが、増大し繁栄するならば、彼は勝利の気分を味わい、それらが減少し消え去るならば、彼は落胆を感じるであろう（pp.291-292)。」

このように自己の説明に外的対象物を用いる見解は、19世紀から存在していたにもかかわらず、長い間実証されることはなかった。それは精神分析学や臨床研究では、そのことが暗黙の了解として捉えられていたこと（Lancaster & Foddy, 1988）、自己の定義自体が研究の立場によって一貫していないこと、さらに実証研究にのりにくい理論上の概念であるといったステレオタイプが研究者の間に浸透していたことなどに、理由の一端をもとめることができるであろう。

しかしながら、その後、McClelland（1951）やPrelinger（1959）などにより、“拡張された自己”[2]に関する実証研究が行われるようになった。彼らは、Jamesの主張を基に、人が自己の一部と見なし得る外的対象物をカテゴリー化することにより、自己の構造を明らかにしようと試みた。前者のMcClellandは、人が外的対象物に対して統制し得る力を持つ場合、それらの対象物を自己の一部とみなすであろうと考え、次のような自己同一化対象物の階層を見出している。①私、私の「自由意志」、②私の身体・私の意識、③私の所有物、④私の友人、⑤見知らぬ人々、物質的万物。また後者のPrelingerは、あらかじめ用意した160項目に対して、どの程度自己の一部であると思うかを４点尺度（０～３点）で評定させることにより、次のような拡張自己カテゴリーおよび自己得点の平均値を得ている。①身体の一部分（肌、喉、指など；M=2.98）、②心理的過程あるいは体内的過程（良心、覚醒された性的感情など；M=2.46）、③個人的特徴や属性を表すもの（年齢、職業、誕生日など；M=2.22）、④物的所有物や生産物（時計、化粧品、目からこぼれる涙、汗など；M=1.57）、⑤抽象的概念（社会的モラル、科学の成果、法律など；M=1.36）、⑥他の人々（街の住人、思い出の人、父など；M=1.10）、⑦距離の近い物理的環境内にある対象物（手の中の土、この部屋の家具など；M=.64）、⑧距離の離れた物理的環境（隣接している部屋、月など；M=.19）。なお同様の知見は、Dixon & Street（1975）が子供と青年を、またKeller, Ford, & Meacham（1978）が小学校入学前の幼児を対象に行った調査結果からも得られている。

その後、Belk（1987）は、Prelinger（1959）の調査方法を基に、拡張自己とみなされる外的対象物の違いを、性別、年齢別に明らかにしようと試みた。より具体的な調査内容は、19歳から78歳の成人男女を対象に、様々な内容からなる96項目について、「自己」—「非自己」の４点尺度（４～１点）で評定させるものであった。そして一つ一つの項目ごとに得点の高さを比較したところ、男性に比べて女性の方が、また若い人に比べて年齢層の高い人の方が、より多くの項目を拡張自己として捉えていることを見出している。このようなBelkの調査結果より、拡張自己の内容は、性や年齢によって異なる可能性が示唆された

ことになるが、Prelingerの研究と違って構造化されていないため、カテゴリーごとの違いに言及できない点が問題であろう。

また日本では、Ikeuchi & Fujihara（1997）が、日本人の拡張自己構造を探索的に検討している。その結果、全101個からなる「拡張自己の測定項目」を提唱し、次のような7つの拡張自己カテゴリーを見出している。①心理的・体内的過程、②自分自身の産出物、③身体の一部、④近接環境内の対象物、⑤個人的特徴や属性を表すもの、⑥物的所有物、⑦距離の離れた物理的環境。

その他、拡張自己に関する既存研究としては、特に身体の一部と自己との関連性に焦点を当てたBelk & Austin（1986）の研究がある。彼らは、目、髪、足といった様々な身体の一部がどの程度自己の一部とみなされているのかを検討し、性別や年齢によって身体の部位と自己意識との結びつき方が大きく異なることを見出している。なお、同様の知見は、藤原・池内（1996）の調査からも得られている。

また最近では、拡張自己の喪失という観点から取り組まれた池内・藤原・土肥（2000）の研究がある。彼らは、拡張自己の中でも特に物的所有物に焦点を当て、阪神大震災とノースリッジ地震（アメリカ・カリフォルニア州）の被災者を対象に、拡張自己カテゴリーと喪失物に付与する価値との関連性について検討した。その結果、阪神大震災の被災者では、喪失物に対して情緒的な結びつきを持っている人ほど、またノースリッジ地震の被災者では、自分自身を他者にアピールするための手段として喪失物を価値付けている人ほど、モノを自己の一部としてみなす傾向にあることを見出している。

以上、拡張自己についてなされた実証研究を概観した。このように拡張自己に関しては、その考え方自体は昔からあるものの、実証研究例は未だに乏しく、上述した程度の知見しか得られていないのが実状である。しかもその多くは、アメリカでの調査研究であるため、得られた知見をそのまま日本人に適用するには限界があると思われる。なぜなら文化心理学の領域では、西洋と東洋の自己観には顕著な違いがあることが見出されており（浜口，1982；北山・唐澤，1995；南，1983；Markus & Kitayama, 1991など）、拡張自己を「自己」の一つの捉え方と見なすのならば、西洋と東洋、さらには他の文化・社会的背景によってその構造が異なることは、容易に予想されるからである。

そこで本研究では、Ikeuchi & Fujihara（1997）の提唱した「拡張自己の測定項目」を基にして、日本人の拡張自己構造を再検討するとともに、国の違いを超えて、その構造がどの程度普遍性を持っているのかについて検討することを主目的とする。その際、Belk（1987）の調査結果より、拡張自己の内容は性や年齢によって異なる可能性が示唆されていること

から、日本人の拡張自己構造の検討においては年齢要因を、普遍性の検討においては性別要因を、それぞれ分析視点として組み入れることにする。

なお本研究では、拡張自己構造の普遍性を検討するにあたり、調査可能な国の中から非常に特殊な文化的・社会的背景を持つスペイン、中国、アメリカ、日本の４カ国を調査対象とする。例えばスペインは、国民のほぼ83％がキリスト教（カトリック）を信仰している（電通総研・余暇開発センター，1999)、先進諸国の中では比較的発展が遅れている、個人主義とされている国の中ではかなり集団主義的色彩が濃い（Hofstede，1991）などの文化的・社会的背景を特徴としている。また中国の特徴としては、日本と同じ東洋の国であるにもかかわらず、多民族国家であること、社会主義国家であったこと、極端なエスノセントリズムであるが故に経済発展が遅れていること（Triandis，1995)、日本人とは全く異なった価値観を持っており、徹底した個人主義者であること（千石・丁，1992）などが挙げられるであろう。さらに西洋先進国の代表であるアメリカ（アメリカ合衆国）は、多民族・多宗教社会、個人主義社会であり、経済格差や人種差別が非常に激しい国である。このようにこれら３カ国は、宗教や価値観、経済水準といった様々な次元で日本と文化的・社会的背景を異にしている。したがって、これらの国を調査対象とすることは、拡張自己構造の一般化を図るという点で有効的であり、なかでもアメリカを取り上げることは、Prelinger（1959）やBelk（1987）の既存データとの比較も可能となることから、非常に意義があるといえよう。

方　法

１．日本人の拡張自己構造の検討

調査対象者：広島市に住む20歳以上80歳未満の成人男女を母集団（868,305名）とし、平成11年10月の選挙人名簿から1,000名の調査対象者を無作為に抽出した。なお抽出方法は、第一次抽出単位を投票区（25区)、第二次抽出単位を個人（各投票区から40人ずつ抽出）とする多段抽出法を用いた。有効回答191名[3]の内訳は以下の通りである。

性別構成：男性65名（34.0％)、女性126名（66.0％）

年齢別構成：20歳代20名（10.5％)、30歳代30名（15.7％)、40歳代40名（20.9％)、50歳代48名（25.1％)、60歳代37名（19.4％)、70歳以上16名（8.4％）

調査方法：郵送法による質問紙調査（謝礼なし)。調査の主旨を説明した依頼文、調査票および返信用封筒を１セットとして送付した。ただし調査時期が年末の多忙期に近いため、

督促状は出さなかった。

調査時期：1999年11月中旬～12月初旬

質問紙の構成：

1）拡張自己に関する質問

Ikeuchi & Fujihara（1997）の「拡張自己の測定項目（全101項目）」から、調査対象者の負担を極力減らすため、ここでは過去数回に渡る予備調査において説明力が高く、またあらゆる年齢層の人々に適していると思われる20項目のみを抜粋して用いる。そして“目”、“母親”、“太陽”、“購入したモノ”などの項目に対して、どの程度自己の一部と思うかを、「自己（3点）」—「非自己（0点）」の4点尺度で評定させる。

2）基本属性（性別、年齢）

2．拡張自己構造の普遍性の検討

【日本】

調査対象者：関西学院大学の学部生・大学院生156名。このうち男性は50名（32.05%）、女性は106名（67.95%）、平均年齢は20.33歳（*SD*＝1.57）であった。

調査方法：質問紙調査。学内にいる学生に個別に調査依頼し、承諾した調査対象者に質問紙を直接配布し、回収。

調査時期：1998年7月～8月

【スペイン】

調査対象者：コンプルテンス大学[4]の学部生・大学院生118名。このうち男性は33名（28.70%）、女性は82名（71.30%）、不明3名。平均年齢は21.14歳（*SD*＝2.38）であった。

調査方法：質問紙による集合調査法。現地の調査協力者により、質問紙を配布・回収。

調査時期：1998年10月～11月

【中国】

調査対象者：中国吉林大学[5]の学部生・大学院生198名。このうち男性は101名（51.01%）、女性は97名（48.99%）、平均年齢は21.85歳（*SD*＝3.24）であった。

調査方法：質問紙による集合調査法。日本在住の中国人留学生が帰国した際、質問紙を配布・回収。

調査時期：1998年8月～9月

【アメリカ】

調査対象者：カリフォルニア州立大学ノースリッジ校[6]の学部生・大学院生87名。このう

ち男性は50名（57.47%）、女性は37名（42.53%）、平均年齢は26.6歳（SD=3.56）であった。

調査方法：質問紙による集合調査法。本論の筆者自身が、調査に関する説明をした後、質問紙を配布・回収。

調査時期：1998年５月

質問紙の構成（４カ国共通）：

１）拡張自己に関する質問

Ikeuchi & Fujihara（1997）の「拡張自己の測定項目（全101項目）」から、ここでは過去数回に渡る予備調査において説明力が高く、また全ての調査対象国に適していると思われる39項目のみを抜粋して用いる。回答方法は１と同様。

２）基本属性（性別、年齢）

※なお各国に配布した質問紙は、アメリカにおいては、日本語版を英語に翻訳したものを、またスペインにおいては英語版を基に、中国においては日本語版を基に、それぞれネイティブスピーカーによって各国の言語に翻訳されたものを、数度のワーディング調査を経た上で用いた。

結　果

１．日本人の拡張自己構造の検討

拡張自己項目（20項目）の因子分析結果

まず本調査で用いた20個の拡張自己項目に対して、共通性の推定方法を主因子法（対角要素に最初に１を入れて値が収束するまで反復推定を行う方法）、回転方法をプロマックス回転として因子分析した。その結果、固有値の順次変化、及び因子の解釈可能性の２点から５因子が抽出された（Table１参照）。なお、項目選択にあたっては、当該因子に対する負荷量が.40以上で、他の因子に対する負荷量が.30以下であることを基準としている。

第Ⅰ因子には、“目”、“手足”、“髪の毛”など、身体の部位を中心とした５項目が高い負荷を示しているため、「身体の一部」を表す因子と解釈できる。第Ⅱ因子は、“宝にしているモノ”、“購入したモノ”といった物質的なモノを中心とした５項目が高い負荷を示しているので、「物的所有物」を表す因子と考えられる。第Ⅲ因子には“月”、“海”、“太陽”の３項目が高く負荷しているため、「自然環境内の対象物」と命名できる。第Ⅳ因子は“感情”、“精神”、“心”の３項目が高い負荷を示しており、「心理的・体内的過程」と解釈できる。最後の第Ⅴ因子には、“父親”と“母親”の２項目の負荷が高いことから、「大切な

Table 1　拡張自己項目（20項目）の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
目	.896	.037	-.091	.027	-.037
手足	.860	-.037	.092	-.080	.016
髪の毛	.806	.047	.066	-.057	-.030
口	.600	-.043	.079	.298	.046
性格	.474	.028	-.286	.253	.080
部屋にあるモノ	-.096	.896	-.071	.001	.078
宝にしているモノ	-.079	.733	.147	.057	.043
購入したモノ	.004	.729	.053	-.006	-.035
プレゼントされたモノ	.205	.570	.198	-.112	-.047
作ったモノ	.178	.435	-.095	.157	-.066
月	-.047	.021	.876	.039	.023
海	-.037	.036	.864	.008	-.067
太陽	.044	-.005	.768	.026	.094
感情	-.089	.036	.011	.926	-.058
精神	.056	.031	.020	.748	.016
心	.185	-.059	.086	.608	.013
父親	-.027	.005	.014	-.006	.955
母親	.016	-.024	.033	-.008	.871
友人	-.018	.100	.369	.100	.330
配偶者	.160	.168	.199	-.151	.261
因子間相関					
Ⅰ. 身体の一部		.224	.142	.348	.289
Ⅱ. 物的所有物			.531	.094	.426
Ⅲ. 自然環境内の対象物				-.020	.496
Ⅳ. 心理的・体内的過程					.097
Ⅴ. 大切な人々					

人々」を表す因子と考えられる。また各因子の信頼性係数は、順にⅠ：α＝.859、Ⅱ：α＝.825、Ⅲ：α＝.895、Ⅳ：α＝.807、Ⅴ：α＝.892であり、いずれも十分に高い値となっている。

拡張自己構造の検討（年齢別）

次に拡張自己の構造を年齢別に検討するために、年齢要因を独立変数、拡張自己カテゴリーごとに算出した簡便的因子得点（以後、「平均的自己得点」）を従属変数として一元配置の分散分析を行った。なお年齢要因は、20代と30代を「相対的若年齢層（以下、若年齢層）」、40代と50代を「相対的中年齢層（以下、中年齢層）」、60代以上を「相対的高年齢層

（以下、高年齢層）」の３水準に区分した。その結果、「自然環境内の対象物」と「大切な人々」において主効果が有意となり、「物的所有物」においては有意傾向が認められた（順に、$F(2,176)=8.21$, $p<.001$；$F(2,174)=3.33$, $p<.05$；$F(2,177)=2.71$；$p<.1$、Figure 1 参照）。

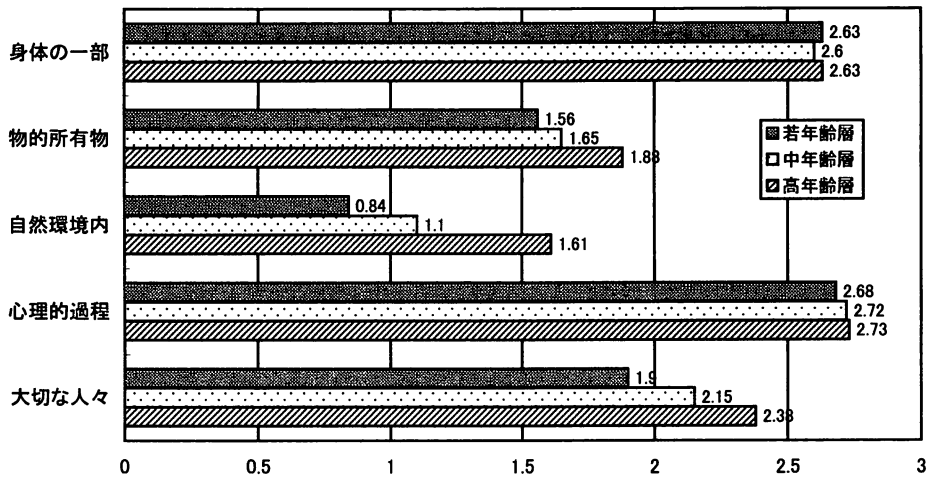

Figure 1　拡張自己カテゴリーの平均的自己得点（年齢別）

そこで「自然環境内の対象物」においてTukey法による多重比較を行ったところ、若年齢層（$M=.84$, $SD=.80$）と高年齢層（$M=1.61$, $SD=1.07$）の間、中年齢層（$M=1.10$, $SD=.97$）と高年齢層の間で平均値の差が有意となり（$MSe=.92$, $p<.05$）、年齢が高くなるにつれ、月や太陽といった自然に存在するものを、より自己の一部とみなすことが示された。

しかし各項目は、「自己（３点）」—「非自己（０点）」の４点尺度で評定されているため、もし対象項目が、自己と非自己の丁度中間に位置するものとみなされるならば、理論的平均値は1.5となる。このことを踏まえて各年齢層の数値自体に着目すると、「自然環境内の対象物」の得点においてはいずれの年齢層も低く、特に若年齢層と中年齢層は1.5に達していないことが分かる。したがって上記の結果の解釈においては、むしろ“高年齢層だけは、自然環境内の対象物を完全に「非自己」とはみなしていない”、という控え目な表現に留めておく方が妥当であろう。

さらに「大切な人々」においても同様に多重比較した結果、若年齢層（$M=1.90$, $SD=.85$）と高年齢層（$M=2.38$, $SD=.87$）の間で平均値の差が有意となり（$MSe=.85$, $p<.05$）、年齢の高い人は低い人に比べ、重要な他者を拡張自己とみなしていることが確かめられた。

なおFigure 1に示された結果をみると、ほとんどのカテゴリーにおいて年齢が高い群は、他の群に比べて平均的自己得点が高くなっており、より外的対象物を自己の一部として捉えているのがわかるであろう。これは、Belk（1987）の調査結果に多分に一致するものとなっている。

2．拡張自己構造の普遍性の検討

拡張自己項目（39項目）の因子分析結果

まず4カ国全ての被調査者559名（男性234名、女性322名、不明3名）を対象に、39個の拡張自己項目について因子分析をしたところ（主因子法、プロマックス回転）、固有値の順次変化、及び因子の解釈可能性の2点から7因子が抽出された（Table 2参照）。なお、ここでも項目選択にあたっては、当該因子に対する負荷量が.40以上で、他の因子に対する負荷量が.30以下であることを基準とする。各因子は、高い負荷を示した項目内容を基に解釈すると、順に、Ⅰ.「大切な人々」因子（6項目）、Ⅱ.「物的所有物」因子（8項目）、Ⅲ.「身体の一部」因子（6項目）、Ⅳ.「自然環境内の対象物」因子（4項目）、Ⅴ.「心理的・体内的過程」因子（3項目）、Ⅵ.「宗教」因子（2項目）、Ⅶ.「学校」因子（1項目）といえるであろう。なお第Ⅶ因子には1項目しか負荷しなかったため、以下の分析からは除外する。また各因子の信頼性係数は、順にⅠ：α＝.838、Ⅱ＝.857、Ⅲ：α＝.821、Ⅳ：α＝.839、Ⅴ：α＝.521、Ⅵ：α＝.707であった。第Ⅴ因子の値が若干低くなってい

Table 2　拡張自己項目（39項目）の因子分析結果

Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ	
母	.907	宝にしているモノ	.730	鼻	.875	月	.781	心	.600	神	.641	学籍番号	.547
父	.846	部屋にあるモノ	.712	口	.871	太陽	.731	性格	.495	宗教の教え	.621		
兄弟・姉妹	.673	お気に入りの場所	.617	髪の毛	.701	海	.667	精神	.451				
家	.616	購入したモノ	.543	手足	.652	地球	.609						
友達	.526	写真	.496	目	.640								
両親の教え	.511	作ったモノ	.471	年齢	.462								
		贈られたモノ	.458										
		学生という身分	.411										

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
Ⅰ．大切な人々		.204	.224	.409	.346	.247	.301
Ⅱ．物的所有物			.176	.206	.205	.170	.241
Ⅲ．身体の一部				.051	.420	.061	.249
Ⅳ．自然環境内の対象物					.049	.266	.295
Ⅴ．心理的・体内的過程						.006	.160
Ⅵ．宗教							.202
Ⅶ．学校							

るが、全体的にはかなり高いレベルで信頼性が確保されているといえよう。

拡張自己構造の検討（国別・性別）

次に、拡張自己の構造を性別および年齢別に検討するために、国別要因と性別要因の2要因を独立変数とした二元配置の分散分析を行った。なお従属変数には、先の拡張自己項目（39項目）の因子分析結果を基に、カテゴリーごとに簡便的因子得点（平均的自己得点）を算出して用いた。

Table 3　拡張自己カテゴリーの平均自己得点（国別×性別）

		大切な人々	物的所有物	身体の一部	自然環境内	心理的過程	宗教
国別	日本	1.84 (.73)	1.89 (.54)	2.30 (.65)	1.09 (.76)	2.63 (.48)	.67 (.64)
	スペイン	2.47 (.48)	2.13 (.50)	2.46 (.59)	1.28 (.71)	2.54 (.52)	1.65 (.88)
	中国	2.42 (.57)	1.62 (.70)	2.30 (.63)	1.66 (.89)	2.55 (.63)	1.13 (1.18)
	アメリカ	2.40 (.50)	1.89 (.63)	2.39 (.71)	1.55 (.87)	2.71 (.39)	1.72 (.94)
性別	男性	2.21 (.67)	1.74 (.65)	2.23 (.66)	1.49 (.83)	2.54 (.62)	1.27 (1.10)
	女性	2.30 (.63)	1.92 (.62)	2.43 (.62)	1.34 (.85)	2.64 (.47)	1.15 (.98)

注：（　　）内の数値は標準偏差を表す。

Table 3 に示した自己得点を順に見ていくと、まず「大切な人々」に関しては、国別と性別の両要因の主効果および交互作用が有意となった（順に$F(3,543)=41.09$, $p<.001$；$F(1,543)=9.64$, $p<.01$；$F(3,543)=5.83$, $p<.001$、Figure 2 参照）。つまり性別要因においては、男性に比べて女性の方が、大切な人々をより自己の一部とみなしていることが見出された。また国別要因においては、Tukey法による多重比較を行ったところ、日本とスペイン、日本と中国、日本とアメリカ間でその差が有意となった（$MSe=.39$, $p<.05$）。つまり日本人は、他の3カ国の人々に比べて、大切な人々を自己の一部とみなす程度が有意に低いといえる。さらに交互作用が有意となったことから下位検定を行ったところ、スペインにおいて単純主効果が認められ（$p<.05$）、男性（$M=2.06$, $SD=.64$）に比べて女性（$M=2.63$, $SD=.34$）の方が、大切な人々をより自己の一部とみなしていることが確認された。

「物的所有物」に関しては、国別と性別の両要因の主効果が有意となったが、交互作用は認められなかった（順に$F(3,543)=15.58$, $p<.001$；$F(1,543)=5.01$, $p<.05$；$F(3,543)=.35$,n.s、Figure 3 参照）。つまり性別要因においては、男性に比べて女性の方が、また国別要因においては、スペイン、アメリカ、日本、中国の順に、物的所有物をより自己の一部とみなしていることが見出された。さらに国別要因に関してTukey法による多重比較を行ったところ、日本とアメリカ間を除く全ての水準間でその差が有意となった（$MSe=$

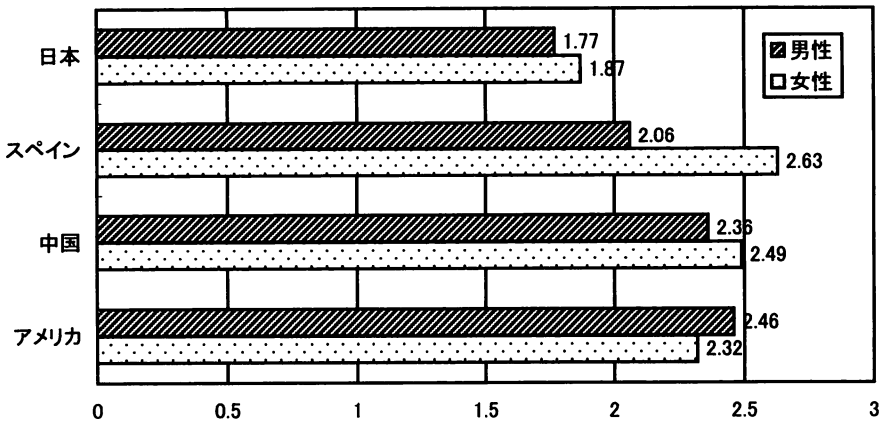

Figure 2 「大切な人々」の平均的自己得点（国別×性別）

.37, $p<.05$)。

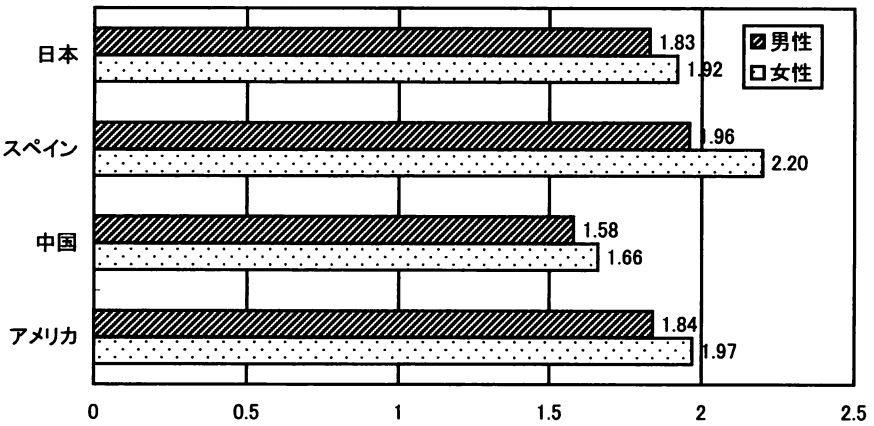

Figure 3 「物的所有物」の平均的自己得点（国別×性別）

また「身体の一部」に関しては、性別要因のみ主効果が有意となり、国別要因および交互作用は認められなかった（順に$F(1,543)=13.67$, $p<.001$; $F(3,543)=4.76$,n.s.; $F(3,543)=.68$,n.s.、Figure 4 参照)。このことより身体の部位を自己の一部と見なす程度には、国による大きな違いはなく、いずれの国においても男性に比べて女性の方が、自分の身体をより自己の一部とみなしていることが見出された。

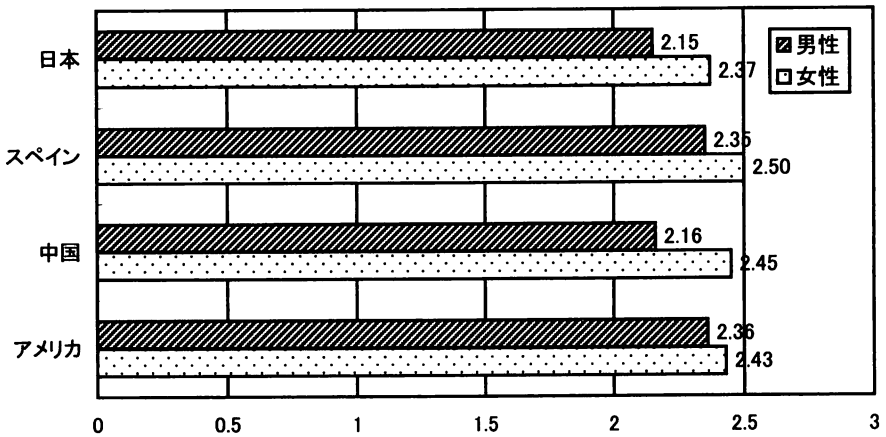

Figure 4 「身体の一部」の平均的自己得点（国別×性別）

「自然環境内の対象物」に関しては、国別要因のみ主効果が有意となり、性別要因および交互作用は認められなかった（順に$F(3,542)=14.26$, $p<.001$；$F(1,542)=.83$,n.s.；$F(3,542)=1.65$,n.s.、Figure 5 参照）。つまり国別要因においては、中国、アメリカ、スペイン、日本の順に、それらの対象物を自己の一部とみなしていることが見出された。さらにTukey法による多重比較を行ったところ、日本とアメリカ、日本と中国、スペインと中国間でその差が有意となった（$MSe=.37$, $p<.05$）。

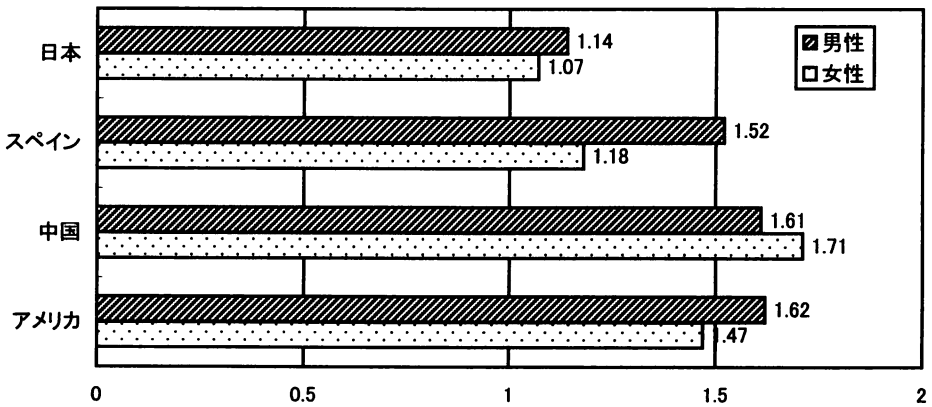

Figure 5 「自然環境内の対象物」の平均的自己得点（国別×性別）

「心理的・体内的過程」に関しては、性別要因の主効果が有意となり、国別要因の有意傾向が認められたものの、交互作用は有意にならなかった（順に$F(1,543)=5.95$, $p<$

.05；$F(3,543)=2.50$, $p<.1$；$F(3,543)=.49$,n.s.、Figure 6 参照)。つまり性別要因においては、男性に比べて女性の方が、心理的・体内的過程を自己の一部とみなしており、また国別要因においては、アメリカ、日本、中国、スペインの順により自己の一部とみなす傾向が示された。

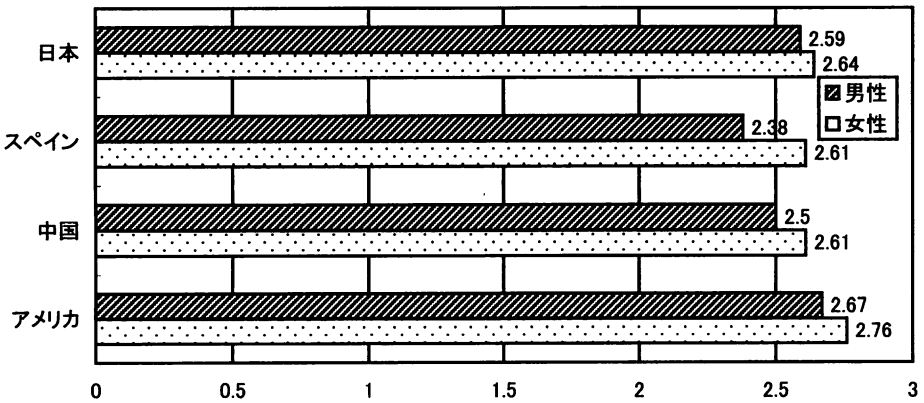

Figure 6 「心理的・体内的過程」の平均的自己得点（国別×性別）

最後に「宗教」に関しては、国別要因のみ主効果が有意となり、性別要因および交互作用は認められなかった（順に$F(3,541)=32.53$, $p<.001$；$F(1,541)=.95$,n.s.；$F(3,541)=.40$,n.s.、Figure 7 参照)。つまり国別要因においては、アメリカ、スペイン、中国、日本の順に、宗教に関する対象物を自己の一部とみなしていることが示された。さらにTukey

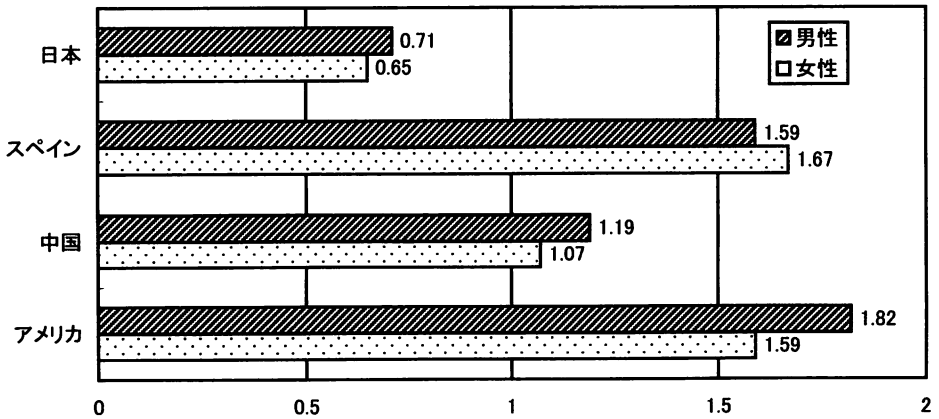

Figure 7 「宗教」の平均的自己得点（国別×性別）

法による多重比較を行ったところ、スペインとアメリカを除く全ての水準間でその差が有意となった（$MSe=.91$, $p<.05$）。

考　察

本研究の主たる目的は、日本人の拡張自己構造を再検討するとともに、拡張自己の構造が国の違いを超えてどの程度普遍性を持っているのかを検討することにあった。より具体的には、まず日本の一般市民を対象に質問紙調査を実施し、拡張自己の構造について年齢別に検討し、続いて日本、スペイン、中国、アメリカの4カ国の大学生を対象に、同じく質問紙調査を行い、性別および国別に比較検討を試みた。ここでは、これらの調査から導き出された結果を整理し、全体的な視点から考察を行うことにする。

本研究では、上記4カ国を対象に拡張自己項目の因子分析を行った結果、拡張自己として、「大切な人々」、「物的所有物」、「身体の一部」、「自然環境内の対象物」、「心理的・体内的過程」、「宗教」の6つのカテゴリー（構成要素）が見出された。これら各カテゴリーの国別の平均的自己得点は、既に結果の箇所で記しているが（Table 3参照）、この情報を基に各国の拡張自己構造をより分かりやすく図示すると、Figure 8のようになる。

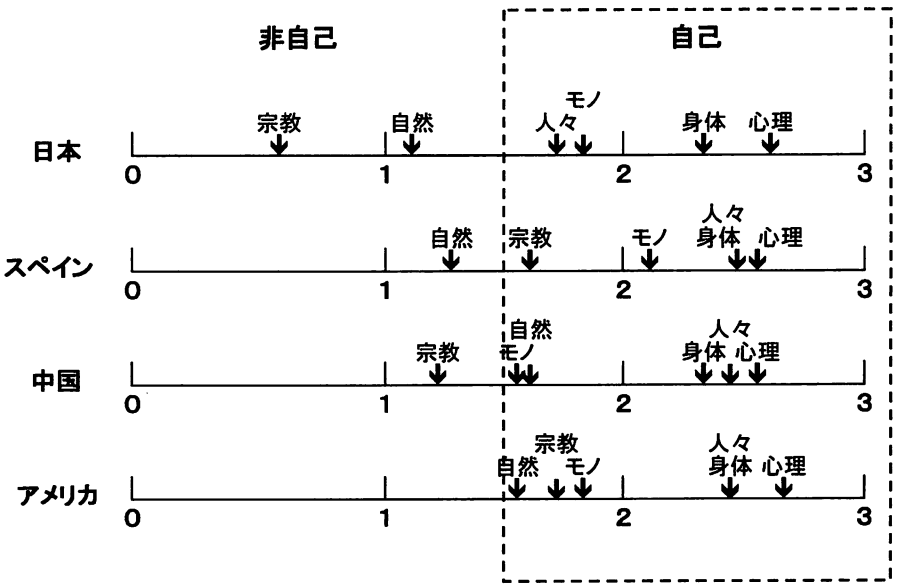

Figure 8　平均的自己得点による自己—非自己の国別比率

この図をみると、日本で最も平均的自己得点が高かったカテゴリーは、「心理的・体内的過程（M=2.63）」であり、以後順に「身体の一部（M=2.30）」、「物的所有物（M=1.89）」、「大切な人々（M=1.84）」、「自然環境内の対象物（M=1.09）」、「宗教（M=.67）」となっているのが分かる。しかし、このうち「自然環境内の対象物」および「宗教」に関しては、得点が理論的平均値である1.5を下回っている。したがって厳密にいうと、日本人の拡張自己は、これら2カテゴリーを除いた残りの4カテゴリーによって構成されていると考えられる。またスペインの平均的自己得点は、「心理的・体内的過程（M=2.54）」、「大切な人々（M=2.47）」、「身体の一部（M=2.46）」、「物的所有物（M=2.13）」、「宗教（M=1.65）」、そして「自然環境内の対象物（M=1.28）」という順であった。しかし最後の「自然環境内の対象物」は1.5を下回っているため、残りの5カテゴリーがスペイン人の拡張自己の構成要素ということになろう。中国の上位3カテゴリーは、スペインと同じく「心理的・体内的過程（M=2.55）」、「大切な人々（M=2.42）」、「身体の一部（M=2.30）」となり、以後大きく差をあけて、「自然環境内の対象物（M=1.66）」、「物的所有物（M=1.62）」、「宗教（M=1.13）」と続いた。このうち「宗教」に関しては、平均的自己得点が1.5に満たないために、中国人の拡張自己も残りの5カテゴリーによって構成されているといえる。アメリカの平均的自己得点の序列は、スペインと全く同じであり、「心理的・体内的過程（M=2.71）」、「大切な人々（M=2.40）」、「身体の一部（M=2.39）」、「物的所有物（M=1.89）」、「宗教（M=1.72）」、「自然環境内の対象物（M=1.55）」の順であった。得点を見る限り、アメリカにおいては、6カテゴリー全てが拡張自己として捉えられているといえよう。

これらの結果より、いずれの国においても共通していえることは、「心理的・体内的過程」、「身体の一部」、「大切な人々」、「物的所有物」の平均的自己得点が、相対的に高くなっているということである。つまり、これら4つのカテゴリーは、国の違いを超えて、ほぼ普遍的に自己の一部として捉えられていることが、結論としていえる。それに対し、「自然環境内の対象物」は、全ての国において相対的に平均的自己得点が低く、むしろ非自己とみなされていることが普遍的にいえるであろう。

これは、Prelinger（1959）の結果とも多分に一致するものとなっている。Prelingerの調査結果においても、「身体の一部」や「心理的・体内的過程」といったカテゴリーは自己としての認識が強く、逆に「自然環境内の対象物」は非自己としての認識が強いことが明示されている。こうした結果を生じた理由の一つは、McClelland（1951）が主張している“統制可能性”といった観点から説明できるであろう。McClellandによると、外的対象物

を自己と認識するか、あるいは非自己と認識するかには、どれだけその対象に対して統制力を行使し得るかということが重要な基準になっているという。つまり、統制力が行使できるほど、その対象は「自己」としてみなされることになる。この主張にしたがうと、確かに本研究においても、統制力がほぼゼロに等しい「太陽」や「海」、「月」といった対象に対する自己得点が低く、完全に自己の統制下にある「心理的・体内的過程」や「身体の一部」といったカテゴリーで、自己得点が高くなっているのが分かる。

ちなみに日本人の拡張自己構造は、McClellandの提唱した自己同一化対象物の階層（①私、私の「自由意志」、②私の身体・私の意識、③私の所有物、④私の友人、⑤見知らぬ友人、物質的万物）と極めて近いものであり、非常に興味深い。このことより、日本人の「自己」—「非自己」の分類は、自分自身の統制力が当該対象に対してどれだけ行使できるかといった、まさにMcClellandの基準にしたがってなされていると推察できる。

なお「大切な人々」は、平均的自己得点を見る限り、確かに4カ国とも自己の一部として捉えられているといえるが、その中で日本の得点がやや低いのが気になる点であろう。これは、調査対象が大学生によるところが大きいと思われる。本研究の前半部分では、日本人の一般市民を対象に拡張自己の構造について、年齢別の検討を行っているが、その際、高年齢層は若年齢層に比べて、重要な他者をより自己の一部とみなすといった結果を得ている。この調査結果は、もし大学生以外の年齢層、特に高年齢層を対象として検討したならば、日本人の「大切な人々」の自己得点が、他国と同等程度になる可能性があることを示唆しているといえよう。また上記の年齢別調査によると、「自然環境内の対象物」においても、年齢が高くなると自己の一部として捉えられるようになることが見出されている。したがって「自然環境内の対象物」の平均的自己得点は、4カ国全てにおいて低かったものの、この結果に関しても、調査対象があくまでも大学生のみである点を留意しておく必要があろう。

また、「自然環境内の対象物」の他に、「宗教」も相対的に平均的自己得点が低く、自己の一部ではないとの認識が強いが、「自然環境内の対象物」と異なる点は、国による得点差が大きいという点である。つまり得点を比較すると、スペインやアメリカに比べて、日本や中国の平均的自己得点、なかでも日本の得点が、非常に低くなっているのが分かる。実際、国別要因と性別要因を独立変数、拡張自己カテゴリーの各平均的自己得点を従属変数として分散分析をしたところ、「宗教」においては、他のカテゴリーよりも遥かに大きな国別要因の有意差が認められた。それでは、一体なぜ「宗教」に関しては、このように国によって自己としての認識が大きく異なるのであろうか。

その原因の一つは、やはり宗教意識の違いによると思われる。スペインとアメリカの共通点としては、いずれもキリスト教の信仰国であるといった点が挙げられるが、電通総研・余暇開発センター（1999）の「世界価値観調査」のデータを見ても、その宗教意識がかなり高いものであるのが分かる。たとえば「宗教は生活の中でどの程度重要か」という質問に対し、アメリカでは約82.9%、スペインでは約57.6%の人が「非常に重要」、「やや重要」と答えており、実際にアメリカでは約43.6%、スペインでは約24.9%の人が週に1回以上は教会に足を運んでいるといった実態が記されている。それに対して日本人の宗教意識の低さも、同様の調査結果において明確に示されている。日本で宗教を「非常に重要」、「やや重要」と答えた人は約21.3%であり、これは調査対象23か国中22位となっている。同じく行動面においても、週に1回以上は寺や神社、教会などに足を運ぶと答えた人は、わずか3.1%にすぎない。これらの結果から、日本は調査参加国中、最も宗教意識の低い国であると結論づけられている。つまり、こうした宗教に対する思い入れの違いが、本研究における平均的自己得点の違いとして反映されたものと思われる。ただし、スペインやアメリカの人々においても、宗教を自己の一部として捉えているか否かは、平均的自己得点の標準偏差の大きさからして非常に個人差があることも、留意しておく必要があろう。なお儒教の国、中国については、予想以上に平均的自己得点が低かった。確かに儒教は中国社会において国民に絶対的な影響力を持っているが、中国ではこれを「儒家思想」と呼んでおり、一般的に宗教ではないと認識されている（王，2000）。それゆえ、たとえ儒教を厚く信奉していたとしても、それは宗教とはみなされないために、結果的に「宗教」の拡張自己得点が低くなったものと考えられる。

また、国別要因と性別要因を独立変数とした上述の分散分析の結果、性別要因においては、「大切な人々」、「物的所有物」、「身体の一部」、「心理的・体内的過程」のカテゴリーで主効果が有意となり、いずれも男性に比べて女性の平均的自己得点が高くなった。つまり、外的対象物を自己の一部としてみなす傾向は、男性よりも女性において強いことが、国の違いを超えて確かめられたことになる。

この結果については、「母性原理（maternal principle）」と「父性原理（paternal principle）」の見地から、考察することができる。これらは、ある文化や社会での対象（他者）との関係の仕方を包括的に説明する概念として、河合（1976）により提唱された用語である。「母性原理」とは、主に母親の子供に対する関わり方にみられるように、人が対象を保護する一方で、自分のもとに抱き寄せて離さず、のみこんだりする面を持つ人間関係や対象に対する心理過程の背後にある原理のことである。それに対し「父性原理」とは、

父親の子供に対する関わり方にみられるような切断、分離、分割に働く原理のことである。つまり外的対象物と関わる際、女性には母性原理が優位に働くことから、父性原理優位の男性に比べて、外的対象物をより自己の一部として捉える傾向が強いのではないかと考えられる。

さて、最後に本研究の問題点と課題について言及しておく必要があろう。まず根本的な問題としては、Prelinger（1959）と本研究のいずれも、拡張自己が連続体であることを前提に調査を行っているが、実はこの前提自体が仮説にすぎないといった点が挙げられる。例えば、仮に「自己スキーマ」概念を用いて、認知的な視点から拡張自己の構造を検討するならば、Prelinger（1959）や本研究で提唱された拡張自己項目は、自己スキーマと結びついていれば自己の一部となり、逆に結びつきがなければ非自己となる。要するに、この場合、外的対象物として挙げられた各項目は、“自己”か“非自己”のいずれかに非連続的に二分され、それらの間には明確な境界が存在することになる。したがって拡張自己の構造についてより明確な知見を得るには、まず拡張自己の連続性の仮定からいま一度検討し、場合によっては調査方法の見直しをはかる必要があると思われる。

また本研究では、拡張自己の構造について、年齢や国別に検討しているが、特に年齢別の検討においては、有権者名簿に基づいてサンプリングしたために、20歳未満の人々に調査することができなかった。しかしながらAllport（1937）が、「自分のモノとみなし得るものが、年齢とともに継続的に広がっていくことを通して自己が拡張される」と主張しているように、外的対象物と自己との関連性について検討することは、発達的にみて非常に意義あることと思われる。したがって、幼児や児童を含めたより幅広い年齢層を対象に、拡張自己の構造を検討することも、今後の課題として挙げられるであろう。

さらに松井・中里・石井（1998）も述べているように、一般的に複数の国を対象とした調査は、サンプリング、調査内容の共通性、調査票の翻訳といった方法論的な問題を含んでおり、本研究も決して例外とはいえない。本研究のサンプルは、4カ国とも全て大学生であり、そのため大学生における拡張自己構造の一般化は不可能ではないが、そこから得られた結果がどこまでその国の全体像を反映しているかというと疑問が残る。また翻訳においても数度のワーディング調査は経ているものの、その内容に全くずれがないという保証はどこにもない。したがって今後は、拡張自己構造の普遍性の検討を行うにあたって、サンプル対象国を増やすことはもとより、こうした問題点に慎重に取り組み、克服することも急務の課題といえるであろう。

註

1）正確にいうとAllportとRosenbergは「自我拡張（ego-extension)」、DittmarとLancaster & Foddyは「自己拡張（self-extension)」という表現を用いているが、各々の意味する内容は同じであるため、本論ではBelkの「拡張自己」と同義として取り扱うことにする。

2）彼らはこの時、まだ「拡張自己」という概念を用いていない。

3）本調査では、1,000名に調査依頼したにも関わらず、191名の回答しか得られなかった。通常の郵送法の調査では、30～50%の回収率といわれており、これと比較しても、本調査の回収率がいかに低いか伺えるであろう。これは、謝礼をつけなかったこと、質問項目の内容が難しかったこと、さらに調査の実施が年末近くであり、多忙な時期であったこと、それゆえ督促状を出さなかったことなどに原因を求めることができると思われる。

4）コンプルテンス大学（Complutense University)：マドリッド市内にあるスペインで最も歴史が古く、最大規模の総合大学。学生数は、およそ10万5000人にもなる。

5）吉林大学（Jilin University)：2000年6月に旧吉林大学をはじめ複数の大学が合併し、教育部直属の新たな重点大学として誕生。新生吉林大学は、11の主要な学問領域を網羅した、中国で最大規模の大学である。学生数は約47,000人。

6）カリフォルニア州立大学ノースリッジ校（California State University, Northridge)：1958年に創立された比較的新しい総合州立大学。学生数は約25,000人で75ヶ国以上からの留学生が学ぶ。また50以上もの専攻があり、その中でも特にビジネス、心理学、リベラル・アーツ、ラジオ・TV・フィルム、シアターアーツの人気を誇る。

引用文献

Allport,G. 1937 *Personality: A Psychological Interpretation.* New York: Henry Holt.

Allport, G. 1955 *Becoming.* New Haven, CT: Yale University Press.

Belk, R. W. 1987 Identity and the relevance of market, personal, and community objects. In Umiker-Sebeok, J. (Ed.), *Marketing and semiotics: New directions in the study of signs for sale* (pp.151-164). Berlin: Mouton de Gruyter.

Belk, R. W. 1988 Possessions and the extended self. *Journal of Consumer Research*, 15, 139-168.

Belk, R. W. & Austin, M. 1986 Organ donation willingness as a function of extended self and materialism. In Venkatesan, M. & Lancaster, W. (Eds.), *Advances in Health Care Research* (pp.84-88). Toledo, OH: Association for Health Care.

電通総研・余暇開発センター（編） 1999 世界23ヶ国価値観データブック 同友館

Dittmar, H. 1992 *The social psychology of material possessions: To have is to be*. UK: Harvester Wheatsheaf, St.Martin's Press.

Dixon, J. C. & Street, J. W. 1975 The distinction between self and not-self in children and adolescents. *Journal of Genetic Psychology*, 127, 157-162.

藤原武弘・池内裕美 1996 「自己」「拡張自己」「身体統制に対する態度」の相互関係に関する社会心理学的研究 消費者行動研究，4，99–114.

浜口恵俊 1982 間人主義の社会－日本 東洋経済新聞社

Hofstede, G. 1991 *Cultures and organizations: Software of the mind.* London: McGraw-Hill.

Ikeuchi, H. & Fujihara, T. 1997 The measurement of extended self, *Paper presented at the Joint Meeting*

of the 45th Conference of the Japanese Association of Group Dynamics and the Second Conference of the Asian Association of Social Psychology (Abstracts), p.154.

池内裕美・藤原武弘・土肥伊都子　2000　拡張自己の非自発的喪失：大震災による大切な所有物の喪失調査結果より　社会心理学研究，16，27–38.

James, W.　1890　*The principles of psychology (Vol. 1)*. New York: Henry Holt.

河合隼雄　1976　母性社会日本の病理　中公叢書

Keller, A., Ford, L. H., & Meacham, J. A.　1978　Dimensions of self-concept in preschool children. *Developmental Psychology*, 14, 483-489.

北山 忍・唐澤真弓　1995　自己：文化心理学的視座　実験社会心理学研究，35，133–163.

Lancaster, S. & Foddy, M.　1988　Self-extensions: A conceptualization. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 18, 77-94.

Markus, H. R. & Kitayama, S.　1991　Culture and the Self: Implications for cognition, emotion, and Motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

松井　洋・中里至正・石井隆之　1998　愛他性の構造に関する国際比較研究：米国、中国、韓国、トルコ、日本の中学・高校生を対象として　社会心理学研究，13，133–142.

McClelland, D.　1951　*Personality.* New York: Holt, Rinehart, & Winston.

南　博　1983　日本的自我 岩波新書

王　少鋒　2000　日・韓・中三国の比較分化論－その同質性と異質性について－　明石書店

Prelinger, E.　1959　Extension and structure of the self. *Journal of Psychology*, 47, 13-23.

Rosenberg, M.　1979　*Conceiving the self.* New York: Basic Books.

千石　保・丁　謙　1992　中国人の価値観　サイマル出版会

Triandis, H. C.　1995　*Individualism & collectivism.* Boulder, Colorado: Westview Press.

—2003.12. 3 受稿—